



『ドイツ・ラインとワインの旅路』  
東京書籍 2200 円  
『名画による歴史探訪』  
(訳) 岩波書店 3200 円  
『ほらふき男爵の冒険』  
(訳) 岩波文庫 600 円

本誌でおなじみの放送大学東京多摩学習センター、その所長である新井皓士さん(68)にこの夏初めてお目にかかった。放送大学特任教授でもあり、一橋大学名誉教授でもある方だが、その温かな雰囲気、ユーモア溢れる話し振りに惹きつけられ、読者のみなさんにぜひ紹介したいと取材を申し込んでいた。そうして晩秋の空が澄み渡る日に、日々多忙な所長さんにお話を伺うことができた。

## 「学問」と「ワイン」には無限の楽しみあり

放送大学東京多摩学習センター所長・特任教授 新井 皓士さん

新井さんは神奈川県小田原市生まれ。県立小田原高校時代から哲学的な本や古典をよく読み、文人への憧れがあった。卒業後は東京大学へ進み、ドイツ語ドイツ文学を専攻。

修士課程を終了した後、静岡大学のドイツ語専任講師となった。青春の日々、仲間と酒を酌み交わし、この地で酒の愉しみを覚えた。浜松で1年、静岡で4年を過ごしたのち、一橋大学へ迎えられる。

「木々の梢、特に櫻を見て、武蔵野へ来たなあとまじり感じましたね」  
専門はドイツ文学と文体統計学。さて文体統計学とはどういう学問なのだろう。

「人文主義・宗教改革・農民戦争時代に、製紙業と活版印刷術が普及して、匿名の著述やパンフレット類がかなり大量に出回り、作者不明のものが多い。これを従来とは違う方法で解明できないかと思ったり、コンピュータ類が身近に使えるようになった(1980年代)のが文体統計学を始めた直接のきっかけです」。これまでのデータを整備するには多くの時間がかかるが、いざれ文体統計論をまとめたいと思っている。

30代半ばと40代後半に2回ドイツで暮らした。1回目はフンボルト留学生として、フライブルクに約2年滞在。2回目はロマンチック街道の出発点であるヴュルツブルグの大学で2年間、日本語と日本の古典を教えた。新井さんのフィールドはドイツ文学に留まらず、日本の古典や近代文学にも及んでいる。

フライブルグはバーデン・ワイン、ヴュルツブルグはフランケン・ワインと、どちらもワインの産地に近い美しい街。新井さんにとってドイツワインに親しむ絶好の地であった。「人ごみよりも自然が好き」なので、週末ごとに中古のマイカーを駆ってあちこちに出かけた。ライン河に沿ってその源流を求め、小さな街やワインの産地を訪ねる一人旅。その道運の旅を「ドイツ・ラインとワインの旅路」という1冊にまとめた本がある。

読んでみて驚いた。あまりの内容の濃さに。行く先々の土地にまつわる歴史や人物はいうに及ばず、ワインの深い知識、音楽や美術の世界、ミクロの視線からマクロな視野へ、変幻自在な「知」の煌びやかさ。失敗談や出会った人々の臨場感あふれる面白話。津田孝二氏のそれは美しい写真の数々や古い図版とともに、ラインとワインが解る珠玉の書だ。

所長の話は、「友愛数」のこと、独和辞典編修のこと、源氏物語や樋口一葉の文体について、などに及ぶ。深い学識に裏づけられた話は凡俗の身にとっては「いと、難きこと」。けれども常に含羞にみちた笑みで語られると、「錆び付いた頭を今一度、磨かねば」と学ぶ意欲が湧いてくる。

かと思うと、アカデミックな話の合間に「床屋に行ったのは30年間のうちに3回かな。息子が生まれた時とあとは：面倒だからいつも自分でカットしていますよ」など入るので、その落差がまた楽しいのだ。放送大学の学習センターは全国に50カ所ある。その所長会議への出席、来年度の面接授業、50科目のパーフェクトな計画を立てることなど、所長としての仕事は多岐にわたる。昨年度から「文章心理学」「再入門」という標題で面接授業を受け持ち、1月には、「源氏物語「宇治十帖」の講義をする。さらに来年度は「平家物語」を多角的に扱う予定である。

今一番欲しいのは「時間」。毎晩のワインの時間は至福の時ですか、と問うと「何も考えなくていいから、いいですねえ」と意味深長な答えが返ってきた。